

PV-NetNews



PV-Net News第27号 2013年10月15日発行 ■発行人:藤井石根 ■編集人:伊藤麻紀 ■発行所:特定非営利活動法人太陽光発電所ネットワーク
〒113-0034 東京都文京区湯島1-9-10湯島ビル602 TEL03-5805-3577 FAX03-5805-3588 ※記事および写真等の無断転載はお断りいたします。
■記事・広告等のお問い合わせ E-MAIL info@greenenergy.jp TEL 03-5805-3577 www.greenenergy.jp

太陽光発電のことを英語でPhotovoltaic power generationといい、略して「PV」と呼ばれています。
太陽光発電所ネットワークの英文名称PV Owner Network Japanを省略して、この会の名称を「PV-Net」としています。

CONTENTSもくじ

1 もくじ

10周年、総会、学校報告

2-5

□ 10周年と総会報告

□ 再スタートの年にむけて

都筑建

特集

6-8 新体制について

伊藤麻紀

9-10 ソーラーシェアリング

都筑建

11 グリーン電力証書普及

演奏家田中正敏インタビュー

12-13 各地の発電量データと

太陽光発電所マップ

14-15 自然エネルギー学校

16 市民ファンドサポートセンター報告

17 川柳と RE2013 年出展写真

18-22 地域の動き、活動報告

関西・静岡・山梨

神奈川・茨城・埼玉

22 発電所長のつぶやき

23 理事会報告

24 事務局からのお知らせ

PV-Net 創立 10 周年記念イベント

2003 年に発足した太陽光発電所ネットワークは今年 5 月、創立 10 周年を迎えました。5 月 25 日に恵比寿シースクエアにて開催された「PV-Net 創立 10 周年記念イベント」は、PV-Net の 10 年間のあゆみを振り返りながら、これからの PV-Net の未来を描く報告と懇親、そして新しい出会いと再会の場となりました。ご来場の皆さまありがとうございました。(2 ページ)



2013 年度 PV-Net 通常総会

7 月 27 日、盛夏の暑さのなか、今年も PV-Net 総会が明治大学リバティータワーにて開催されました。今回は 2 年に 1 度の役員改選の年。事務局スタッフを含む 5 名を迎え新たな理事体制でのスタートとなりました。11 年目を迎えた PV-Net のさらなる飛躍に向け、これからの活躍が期待されます。

総会第 2 部の講演会には、OM ソーラー株式会社から村田昌樹 取締役を迎え、「ソーラーライフ 〜エネルギーと暮らし〜」をテーマに、太陽の光や熱、自然の風など自然界にあるエネルギーを住まいや暮らし方に取り入れる「パッシブデザイン」の考え方についてお話いただきました。

(2, 3 ページ)



自然エネルギー学校

(小諸・野田村) を開催しました

今年、市民共同発電所が完成した長野県の小諸エコビレッジと岩手県野田村を舞台に自然エネルギー学校を開催しました。プログラムは、各地で盛んに行われている独立型太陽光発電システムの制作をはじめ、実際の市民共同発電所を教材にした不具合測定体験、いま注目のソーラーシェアリング（農電併業）の解説など、盛りだくさん。自然エネルギー学校は、エネルギーに詳しい人もそうでない人も、一緒になって共に育む「共育」の場となりました。(14, 15 ページ)

PV-Net10 周年、新たなスタート

～ 5月25日 創立10周年記念イベントと、7月27日 通常総会が行われました ～



〈総会後記念撮影@明治大学〉

まずは10周年のご挨拶を申し上げます。さて、PV-Netにおきましては、本年5月をもちまして創設10周年を迎えることとなりました。

これもひとえに創設の時代から現在に至るまでの会員皆様をはじめ、各時代の理事の皆様、歴代事務局スタッフの皆様のご愛顧のおかげと、感謝の気持ちでいっぱいです。

この機会に、一同心を新たに、今まで以上に一生懸命努力する覚悟でございますので、何卒、倍旧のご支援、ご協力くださいますよう、心よりお願い申し上げます。

**2013年5月25日（土）PV-Net
創立10周年記念イベント
@シースクエア恵比寿**

元環境省事務次官小林光氏の挨拶からスタートした10周年記念イベント。第1部では、PV-Net10年の歩みと、会員・地域活動の紹介、そして再生可能エネルギーで日本を先導するドイツの再生可能エネルギーのいまを、ドイツ貿易・投資振興機関再生可能エネルギー部門シニアマネージャーであるトビアス・ロートハッ

ハーさんに、中継にて報告していただきました。第2部では、おいしい料理、理事の歌やマジック、表彰式、会報川柳の人気投票など、さまざまな催しで10周年を盛大に祝いました。当日の本編の様子は以下のアドレスからも見ることができます。

<http://www.ustream.tv/recorded/33288143>



〈表彰を受ける佐藤俊夫さん〉

**2013年7月27日（土）
2013年通常総会@明治大学
リパティタワー13F 1136教室**

7月27日、東京・御茶ノ水の明治大学で、PV-Net2013年通常総会が開催されました。

総会成立には、委任状を含む正会員数の1/4以上の出席が必要となりますが、この日の参加者は58名。加えて、委任状提出者が576名、書面評決が117名の計757名となり、定足数に達していることから、通常総会の成立が議長より宣言されました。総会では、1号議案「2012年度活動報告」、2号議案「2013年度決算報告」、3号議案「2013年度活動方針」、4号議案「2013年度予算」、5号議案「定款改訂」、6号議案「役員専任」について、それぞれ決議を諮り、賛成多数で承認されました。（4号

議案については、前年度繰越金を入れた予算書の作成を求める意見が挙がったため、修正版を後日会員ページにアップします)

今回は2年に1度の役員改選の年。事務局スタッフを含む新しい方5名を迎え、新たな理事体制でのスタートとなりました。11年目を迎えたPV-Netのさらなる飛躍に向け、その活躍が期待されます。

毎年、講師を招いて行うセミナー形式の第2部は、OMソーラー株式会社から村田昌樹取締役を静岡県からお招きし、「エネルギーと暮らし・ソーラーライフ」をテーマにお話いただきました。OMソーラーのコンセプトである太陽の光や熱、自然の風など自然界にあるエネルギーを、住まいや暮らし方に取り入れる「パッシブデザイン」の考え方。ともすれば、投資・お金のことばかりに目が行きがちな私たちにとって、「人間は自然の一部である」ことを再認識させてくれる機会となりました。

第3部の懇親会にも、同じ御茶ノ水エリア内を移動し、40名以上が参加しました。各テーブルでは各地域や会員間の近況、情報の交換やさまざまな議論が行われた暑い熱い1日でした。



村田昌樹 OMソーラー株式会社取締役

～事務局の新しい出発にあたり～

事務局の役割とPV-Netの充実

代表理事 都筑建

1) 10年を積み上げたPV-Netの全体状況

地域交流会は都道府県単位に20あります。都道府県は47ですからまだ半分に達していません。地域交流会として組織的に認められる規模をその運用や効果を考えて会員40名以上と代表者と連絡先が確定される2つの規定が創立以来あります。47×40=1880が均等に分布していると全国に地域組織があることになります。それが20ですから均等ではないということです。会報の会員マップのページを参照するとその分布状況がわかります。

PV-Netは2003年創立で10年の歴史を持っています。この会報も季刊として27号を数え、各号の会員マップの推移をみると関東の東京電力サービスエリアから始まり、それが徐々に今も全国に拡大していることが判ります。

会員の半数以上は占めながらも20/47という領域の地域組織では世話人会という地域運営機関を持っています。平均的に10人前後の会員が地域活動の世話役となり、全国的に200名程度の方々が積極的なボランティアの役割を引き受けており、会員総数がもうすぐ3000名に達するので、世話人の全体に占める割合は約7%ということになります。

世話人はやれないが、総会や各種会合に継続的に参加される会員は、

正確な統計を取っていないのではありませんが、世話人数の5～6倍になると思われます。残りはサイレントマジョリティーの会員(ここでは「静かな会員」と呼びます)となります。圧倒的な「静かな会員」の数です。しかしその「静かな会員」の中にはPV-Greenへ参加している方々が500名近くいます。又「静かな会員」と言っても会員申込書の活動参加希望欄などを見ると少なくない数の会員がボランティア活動を望んでいます。反対に会員としては会費も払い継続するが、そっっとして置いて欲しいという方も相当な数います。このような会員の存在も大切です。又会員本人が年齢を重ねることにより状況が変化もします。

2) センター事務局の役割

地域交流会のない27都道府県の会員や「静かな会員」への対応はセンター事務局で引き受けています。もちろん活発に動く地域交流会のフォローにも時間が取られます。そして国や自治体の補助金や委託事業の申請から受託業務の遂行には一部会員の協力を得ることがあっても主力は事務局が最終報告書・経理処理まで行いかつ、自主事業(PV-Green、市民ファンド、相談事業、教育事業)の継続にも細かい配慮と時間が日常的に求められ、さらに日々変わる状況変化(認定条件の変更など)に従

って無駄のない時間配分や内容改善そのものも必然です。

数か月前から取り掛かることが求められる、理事会を軸とした各種会議の準備と全国から参加する委員への連絡から交通費の処理までの経費削減を考慮した運営と議事録作成・送付と会議を円滑に時間内に実ある内容にする事前調整などは近代通信機器を駆使しても大変な作業です。

PV健康診断は事務局の日常業務として大きな位置を占め、PV-Netの存在意義の根幹になっているものです。しかし3. 11の震災後の外部サーバーの故障が起き、一時的回復があったものの回復ができていません。サーバーを管理している協力者のこれまでの関係からは考えられない対応のために協力が得られず、それでもPV-Netで独自にやれる部分はシステムの専門家も入れ対応を何回かに分け検討し、できる部分の準備作業は進めて、何回も丁寧にお願ひしました。結局、無視の形で放置されるには限度があると理事会判断をし、出費が大幅にかさむが独自に対応を短時間で言うことにしました。このための事務局の費やす時間はばかになりません。

ホームページの更新も日常的な報告変更だけでなく各種事業に合わせた新設・更新が事業の遂行や成果に直結するだけになおざりにできません。

そして事務局業務で最も多く時間を取られるのは電話対応です。ほとんどの方は「たまに」か初めて掛けてこられる人が大半です。電話対応する事務局メンバーはそれまでの業務を中断して行います。一通りの対応マニュアルは身に付けていますが誠実な対応をするためにはどうして

も一定以上の時間が求められます。相談を求める方が短時間に要領よく相談内容を伝えることは非常に難しいことです。たまには齟齬が生まれます。齟齬を解消する時間も気力も結構かかります。

そして何よりも事務局メンバーは生身の人間です。長時間業務には如何にやりがいを持っているからと言っても限度があります。

3) 地域交流会での2つの場面

【ケース1】

A. 「どうなっているのだろう？〇〇の件で事務局に問い合わせているのだけどちっとも返事が返ってこない」

B. 「そうだろう、俺もこの間、こっちから頼んだことを、何日もたってから意味が解らないからもう一度説明しろと言って来たからもっと真剣にやれ、待つものの身にもなれよと言ってやったよ。会費を出している俺たちをもっと大事にしなければ。口のきき方も間違っているじゃないか」

C. 「そうだそうだ」

D. 「あんなのあてにしないでこちらでやりたいことをやろう。分担金も要求しなきゃ」

【ケース2】

A'. 「どうなっているのだろう？〇〇の件で事務局に問い合わせているのだけどちっとも返事が返ってこない。俺たち交流会などには何にもやってくれない」

B'. 「そうだそうだ」

C'. 「俺は東京の事務所に行って実際に事務局の状況をつぶさに説明を聞き、資料も見せてもらったけど、実態は大変な努力で対応している。家庭が心配になるぐらいに、いつも

夜遅くまでやっている。考えてもみてください。総会資料の予算表でも5千万の出費に対して、会費だけでは1千万にもならない人件費も賄えない。後の4千万は事務局が全部委託費などで稼いでいる。つまり事務局の給料も自分たちで賄っている。これはすごいことだよ。交流会も何でもかんでも事務局のせいにする、裏返しに頼りきりになるというのも考え物さ。自分たちに何ができるかを探そう。できない部分は先行している事務局や先進的なほかの世話人の話なども聞いて、一緒にやることで事務局を支えるような、情報共有しながら協力関係でやっていくというのが一番求められているよ」

A' C'. 「そうか、よく考えたらそうだな、情報交換をもっとしよう」

この2つのケース寓話は架空です。しかしこれに近い場面は大なり小なりあります。同じ質問・苦情に対して方向が真反対になっています。「その1」では、事務局は自分たちにやってもらうことが当たりまえ、それがうまく行かなければ勝手にやろうという方向に会話が動いています。

実は他の市民団体の多くでも事務局の置かれる状況は、事務局が誠実であればあるほど批判の対象となりやすい土壌が日本にはあります。一つの大きな原因は会員の多くは会社組織に長年馴らされて、定年退職などで組織を離れる時には環境破壊に加担していた反省や金の為でなく人のためや社会のために働いてみたいとして参加してきます。しかし、頭（精神）は反省し前向きな意欲を持っていても、長年馴らされてきた体は会社内の上下関係や男女序列を基

にする基準・規範に縛られたままか、その鎧をかぶったままの「大人」のままです。PV-Net の様に NGO マインに富んだ若い女性だったりすると、事態を把握している女性事務局員から丁寧な口調であっても指示されたというだけで馴染めず、挙句は激昂する場面も実際にありました。議決権のある会員を限定しているようなところは起こりにくいのですが、PV-Net のような大衆組織であればこれを制していくのは並のやり方ではできないものです。

その2はもともと3000人の組織で4~5人の専従で一般企業と同じようにやれるものではない。会員も分に依りて参加し、センターと協力して協働し合う体制になるように考えも行動も変えるべきだと言っています。

何でもないような対比に見えるでしょうが、場面1をそのまま放置しているのはPV-Netの歴史の中で最大の汚点となった、2005年前後の組織内反目に繋がる要素を持っています。その時の発端は場面1のような事務局への不満を極端に拡大し、それに「内なる東電」という問題が絡んで、開催される理事会が激しい非難の応酬の場と化していきました。

4) 「内なる東電」を乗り越えて

PV-Netのスタートには東電の協力と多額の寄付金という処理を誤れば市民団体としての継続が不可能な結果になるものを孕んでいました。都筑が発起人の一人として自らの事業を辞して参加した決意はこの処理は余人をして不可で、それまで「対立軸のあるコラボレーション」という厳しい自己規制を掛けながら原発

推進の東電と脱原発の市民グループが「自然エネルギー普及」という一点で協力し合う、社会的実践を行ってきた責任者として引き受けたものです。

部分的に問題があったが結果的には東電は「金が出すが、口は出さない」という約束は守りました。懐の深い会社でした。しかし本当に悩まされたのは「内なる東電」です。寄付を東電から取って来てやっているとうそぶく労組関係の会員がいて、まだ組織作りの最中にも拘らず、早い段階で事務局長の私に「変なことをしたら分裂させるぞ」と迫ってくる場面もあり警戒をしていたが、先の場面その1のような不満を持った地域交流会を上手に取り込み分裂寸前までいくような羽目になってしまいました。幸い、経営者の指示のもとで労組分裂をさせるようなやり方や秘密組織の在り方が世話人の中から指摘され、当時の日江井理事長やその後の現、藤井理事長の粘り強い采配で収拾することができました。しばらくはその後遺症を回復するのに多くの労力を強いられました。この経験は貴重であり生かしていく必要があります。

日本の環境・エネルギー関係のNGO・NPOの中でPV-Netほどの会員数と実績と活動力を誇ることは1, 2あるかないかです。

5) 新たな事務局の役割とPV-Netの充実

会員の積極的な活動を活かすことと自己中心の一人勝手な人に振り回されないということを見極めながら地域活動の充実と全体の調和が何よりも今求められています。

都筑建から伊藤麻紀へ事務局長が

変わりました。事務局長はNPOでは組織の要です。都筑はPV-Netの発起人でもあり創立そのものを形にした張本人です。伊藤も創立から事務局を荷なって来ました。引継ぎには最適です。しかし立場がこれまで違っていましたから事務局長として伊藤の型を作っていくには少し時間がかかります。

それに組織を担う藤井と広報を担当する加藤が理事という責任ある立場も担いながら常勤体制で協働してくれます。2人はすでに豊富なNGO・NPOの経験・実績があり、謙虚でもありこれまでのPV-Netになかった資質を生かすことが期待されます。

都筑もこの10年間皆様の絶大な協力を基に新しい試みや活動をさせていただけたことを感謝しつつ、PV-Netの置かれている大変さと引継ぎによる不連続からくるアクシデントを最小に抑えることと次の飛躍の礎を作るために事務局をフォローすべく、しばらく湯島に詰めています。



＜野田村市民共同発電所点灯式での
都筑建代表理事 2013. 6. 9＞

～ 事務局の新しい出発にあたり ～

新組織体制について

事務局長 伊藤麻紀

●PV-Net の歩みと変遷

太陽光発電所ネットワークが発足して10年が経ちました。初期のPV-Netは関東9都県を中心に活動を開始し、各地域で核となる人材を確保する目的もあり、地域ごとに年2回のフォーラム、見学会を開催し、地域で顔の見える関係と交流の場を構築してきました。その当時大きなポイントとなったのは、各地の活動を担う世話人メンバーの育成とPV-Net会員全体の底上げを目的に開催した太陽光発電の基礎知識の連続講座でした。一般的には知られる事のなかった太陽光発電の基礎（発電量や設置に関する知識や注意点など）に関するイロハを丁寧に伝えてきました。『目からウロコが落ちた。とても参考になった』と、既に実践者である皆さんは、まるで水を得た魚のように太陽光発電に関する情報を体系的かつ客観的な知識として吸収し、得た知識を活動の基礎に据え、地域で中心的な活動を担う人材として成長し、また相談員として多くの方々の相談に対応してきました。そしてまた専門部会を立ち上げ、関東各地域から人材を出してもらい、PV-Netの活動について議論と実践を行ってきました。

関東中心に基盤固めを行い、4年目から全国展開を開始しました。九州、愛知、大阪など、地域の中心メンバーと話し合いを行い、関東地域で実践してきた地域交流会づくりのノウハウを水平展開していきました。当初は全体活動、各部会、地域活動を事務局中心に進めていました。事務局員を含め、市民団体の活動経験がほとんどない会員の皆さんと共にPV-Net活動そして、事務所運営をゼロから築き上げてきました。総会ひとつ開催するにも、たくさんの時間がかかりました。各地の会員さん

にお手伝いいただくも、事務局員も初めての経験の中、情報の行き違いなどが生じ、お互いの連携がうまくとれずスムーズな運営に至らないとい

う反省が多く生まれました。事務局員の依頼と指示のもと動いていた会員さん達も3年目、4年目となるとそれぞれの役割を認識し、自立的な判断を持ち、積極的に運営に参加して頂けるようになりました。今では大イベントなどの運営は、運営分担を分け、分担ごとに各地域が責任を持って自立的に運営するスタイルに変化してきています。

地域交流会の活動も同様に変化してきました。事務局指導のもとで進められてきた地域交流会活動も3年目、4年目となると、各地で独自に企画・運営をするようになり、PV-Netの活動方針を軸におきながらも、地域の実情と世話人の方々の関心に見合った活動が展開されるようになりました。今では、地域で新たに取組んだ活動内容を全体化し、PV-Netの活動の中心になる事業も生まれてきています。

●これからの事務局の役割

10年という期間を得て、会員も地域も事務局もそしてPV-Net全体が大きく成長、変化してきました。事務局（全体）と地域の役割分担も明確になってきました。PV健康診断、管理情報、事業プロジェクト情報など各ツールを整え、地域が活動しやすいような活動基盤の整備を重点的に担っていくことが最重要事項の一つであるとともに実践活動の最前線である各地域活動の情報をまとめ、PV-Net全体として発信し、活動としてのまとまりを保つ、それが事務局の役割となってきました。

事務的な実力が問われる一方で、事務局が『活動』という実践の場を失えば、単なる事務処理部門となり、先鋭的な感覚が失われて行きます。プロとして常に最新の情報をキャッチしつ、『市民の立場から自然エ

ネルギーを普及し、エネルギーシフトをはかる』という目的を軸に据え、実践活動の場を持つ地域と連携・協同し、PV-Netの実力を発揮できる方向性を見つけ出し、新たな事業活動に先進的に取り組んでいきたいと考えています。

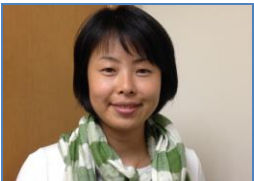
PV-Netの財産は会員みなさん一人一人と、その力が集まった地域交流会の自立的な活動力。そして何よりも、地域活動だけにとらわれず、全体としてステップアップしていくことで社会を大きく動かす活動を目指そうとする協調性と連携力です。活動の実践場となる地域と全体の活動方針を決める理事会を結ぶ事務局の役割として、全体の調和と協調性を上げ、情報や活動の循環を高めことに力を注いでいきたいと感じています。

●バトンを受けて

先代の事務局長が『エネルギー（自然エネルギー）を市民の手に取り戻す』という旗を掲げ、積み重ねてきた経験と実践の上に指揮を執り、世界最大多数の太陽光発電所長が集ったこの大衆組織をPV-Netというひとつの大きな活動としてまとめ上げ、拡大しながらも後退する事なく10年間活動を継続し続けてきた功績は目を見張るものがあります。大型寄付金が4年目で打ち切られた際も、ひるむ事なく、次々と先進的な企画を打ち出し、自然エネルギー社会に『市民の実力』を見せつけ、大きなインパクトを与え続けてきました。日本の中でも先駆的に自然エネルギー界を担ってきた都筑という大きな求心力がPV-Net事務局から退く事でPV-Netの組織体制は大きな変化を余儀なくされます。

次を受け継ぐものとして、都筑を含め先代の方々が築いてきた大きな功績とバトンをしっかりと受け継ぎ、自然エネルギーが『当たり前』となった社会で私たちPV-Netが社会に果たすべき役割とあり方を模索し、その存在感を高めながら、社会変革に結び付く活動を会員の皆さんと共に実践して参りたいと思います。

理事プロフィール紹介

名前/役職	主なプロフィール	抱負・コメント
 藤井石根【代表理事】	明治大学名誉教授、工学博士。1966 年東京工業大学理工学研究科修士課程修了後、同大助手、1947 年に明治大学に奉職。同大助教授、教授を経て現在に至る。専門は熱工学で蓄熱や太陽熱利用関係の研究に従事し、現在は NPO 法人太陽光発電所ネットワーク代表理事、逗子市環境審議会会長、財団法人日本科学振興財団副会長などを務める。主な著書に「21 世紀のエコロジー社会」(編著:七ッ森書館)、「2050 年自然エネルギー100%」(監著:時潮社)、「原発で地球は救えない」(原水禁)など多数。	気候の異変は顕在化かつ常態化しつつある。それに呼応するかたちで再生可能エネルギーの普及促進は世界的に進んでいる。FIT の導入はその面で大きな役割を果たしているが、他方で経済面への影響を理由に懸念する声も聞かれる。かかる現象は PV-Net が置かれている状況が設立時と比べて変わりつつあることを物語っている。そうしたなかでエネルギー供給面で今後、どのように関わっていくべきか、われわれも重要な岐路に立たされている。
 都筑 建【代表理事】新	NPO 法人太陽光発電所ネットワーク代表理事、自然エネルギー推進市民フォーラム(REPP)理事長、NPO 法人ワーカーズコープエコテック理事長。1970 年代に労働運動や脱原発運動に取り組み、80 年代からは自然エネルギーの普及活動に従事。市民の立場からエネルギー問題を考え、省エネや自然エネルギーの普及をめざす活動を続けている。国や自治体の太陽光発電関連の諮問機関等の委員を歴任している。	生活のすべてを注ぎ込んできた事務局長職から期限付きの半専従の共同代表になり、少しは自分の時間が取れそう。私の人生で関わってきたクラシックを中心とした音楽、インターハイ出場経験の体操やファンとしてのラグビー・サッカーのスポーツ、短かったがセミプロの演劇活動、ヒマラヤを目指したロックと冬山の登山、市民感覚を重視した労働運動・労協運動、20 年前からの環境機器の開発と、その市民実践として「せっけん運動のドラム式洗濯機」の開発、大気汚染・放射能自主測定機器の開発と運動化。そして被爆体験をもとにエネルギー問題への取組と途切れず重奏してきた。これからは整理とマトメになるが、PV-Net の次の世代への引継ぎもなおざりにできないのがもう一つの悩みでもある。
 横谷公雄【副代表理事】	長野県立吉田高等学校教諭、同県立上田千曲高等学校教諭を経て、日本大学藤沢高等学校で教諭、教頭、校長を務めた。現在は横浜高等教育専門学校でカウンセラーとして従事する。PV-Net 神奈川地域交流会代表。県下各地で説明・相談会等を開催し、県民へ太陽光発電普及啓発活動を行っている。神奈川県より委嘱の新エネルギーアドバイザー事業および「かながわソーラーセンター」の業務を担当。	PV-Net 発足当初より参加し、太陽光発電の普及・啓発に努めてきた。それは地球環境を憂いたからである。当時からの会員の多くは、同じ心のボランティア活動であった。その PV-Net が満 10 歳を過ぎたということは、多くの会員が持つ PV システムも 10 年を過ぎ、保証期間を超えている。PV-Net に課せられた課題は、保証期間を過ぎ先駆的役割を果たしてきた PV システムへどう対応していくかである。
 三石博行【副代表理事】新	千里金蘭大学教授(フランス、ストラスブール第二大学哲学博士)、京都・奈良 EU 協会副理事長。近畿大学理工学部化学科卒業後、京都大学理学部研究員、関西労働者安全センター常任事務局員、インド・カルカッタ社会学研究所研修員、ストラスブール第二大学哲学言語科学情報科学部博士課程終了、京都大学工学部勤務、金蘭会学園勤務、金蘭短期大学助教授を経て現職。	2012 年 7 月から始まった FIT によって太陽光発電が爆発的に普及し、今年 12 月までに PV を設置する世帯数が 150 万になるといわれています。さらにメガソーラーを入れれば、すでに原発 2 基分の電力を供給しています。言い換えれば PV の大衆的普及は、従来の環境問題への意識の高い人たちの市民運動から、近所でパネルを持つ人々の集まり、生活運動に変わろうとしているのです。その意味で PV-Net は、大きな組織拡大の期待と同時に、その存続も問われています。組織拡大を進めるためには、改めて私たちの運動の特徴を理解しなければなりません。この組織は PV システムの消費者であり同時に電気エネルギーの生産者である人々が運営し、その 2 つの利益を守ることがこの運動の基本となります。具体的には、健康診断、グリーン電力販売、市民共同発電所の建設や管理、また太陽エネルギー利用や再生可能エネルギーの地産地消社会形成運動等の活動を通じて、近所の再生可能エネルギー生産施設の所有者の共同組合的な役割を果たすことになります。そのために地域の PV-Net 運動の情報を日常的に共有する活動が必要になっています。
 伊藤麻紀【専務理事】新	大学卒業後、大手建設会社勤務を経て、2003 年太陽光発電所ネットワーク職員に。以来、相談室、メーカ交流会、PV 健康診断、環境省ソーラー・マイレージクラブ事業、小諸グリーン電力グリーン電力事業などを担当。2013 年 7 月より事務局長に就任。一般社団法人小諸エコビレッジ理事。	自然エネルギーに関わって 13 年。当時目指していた時代が目の前に来ています。この変革のとき、私たち PV-Net は気を抜かず、手を緩めず、その勢いを加速させる動力源であり続けたいと願っています。設立から 10 年という大きな節目を迎え、時代も組織体制も変化の中で、先代が築いてきた大きな軌跡をいかに引き継ぎ、いかに発展させて行くのか…10 年を振り返りつつ、歩いてきた道の再整理を行いながら会の発展に寄与して行きたいと思います。

 武田善明【理事】	三重県生まれ。51歳まで郵便局に勤めていたが「改革なくして成長なし」の猛威に耐え切れず退職。「成長」にかわる言葉、価値は…。著書『スローフードな人生』に出会う。「スローは…」、「のんびりだ」に行きつく。温めてきた内橋克人の「FECの理論」の実践へと突く進む。	中部では毎年11月に「暮らし方交流会」を開催しています。「楽しい太陽エネルギーの利用は！」が毎年のテーマです。今年度は「マネー資本主義」の時代から「都市版・『里山資本主義』」の模索をと議論を続けています。
 梅澤耕一郎【理事】	高校卒業後、農林水産省勤務。2013年3月末日をもって37年間努めた同省を退職。現在は農業(りんご園)を自営。PV-Net 発足時より会を支え、本部の財政部理事ならびに群馬地域交流会の世話人会代表を務める。	組織と財政は活動の両輪と言われています。非常に地味な存在の財政ですが、お金なくては活動もできません。「入るを計って、出るを制す」を合言葉に、亀の歩みのような確実な財政運営をしていきたいと思ひます。また、今年度の地域の世話人会会計のみなさんと一緒にNPO 法人会計の学習を進めていきたいと考えています。
 國井範彰【理事】	富士電機で配線機器の開発、品質保証に従事後、1999年より、埼玉富士の役員に(専務取締役、相談役)。2005年より、PV-Net 理事、相談室長を務める。省エネルギー普及指導員、地球温暖化防止活動推進員、うちエコ診断員。	相談室は、最も会員に近いところで活動すべき組織です。ただ残念ながら、ここ数年、会員にとって大きなメリットであるはずのPV健康診断は、片肺飛行状態で会員の期待に応えられていません。早急に回復させることが、PV-Net 組織あげての第一課題です。相談員としてもPV健康診断が新しい形で回復することに合わせて、新たな活動の姿を作りあげていくつもりです。
 松田廣行【理事】	電力中央研究所で火力発電所から排出するばいじんの調査研究を約20年担当。その後、九電力と共同で内外の膨大な原子力情報を入手し、有効活用する部署での情報管理を10年経験後、広報部を経て定年。研究者時代には、効率よく電気集じん機でばいじんを捕集するためのJIS作成委員として、JIS B 9915「ダストの見掛け電気抵抗率の測定方法」に協力。原子力情報管理時代には米国のTMI事故とソ連のチェルノブイリ事故情報に接する。広報部時代には、電中研のホームページを立ち上げた。	PVに興味を持ったのは、第一次オイルショック後の昭和50年。他の研究部門の研究者が泊江研究所の屋上に各社のパネル計200枚程度並べて、発電データ採取を目撃したときから。月日は流れ、平成3年、太陽電池連系ロードコンディショナの開発実証試験の結果、発電設備設置需要家からの逆潮流許可が出たこと。これが日本式の太陽光発電で生じた余剰電力を電力会社に預ける(売電)というもの。わが家に太陽光が設置されたのは平成9年だ。
 森岡秀幸【理事】新	1948年岐阜市生まれ。大阪で建築・都市計画を学び、人の生活を支える建物のデザインからコミュニティデザインまでの幅広い「まちづくり」を生涯の仕事に。主な仕事は、観光開発、緑地計画などの環境整備計画、市街地整備計画や住宅地計画、交通計画などを手がけ、近年は里山保全などの市民活動を支援するNPO理事なども経験。昨年まで4年間市議会議員を務めた。	私がパネルを設置したり、PV-netに入会したのはそれほど理念によるものではありませんでした。むしろ入会してさまざまなことを学ばせていただきました。こうした会員が増えることは会の活動目的に沿った成果なのでしょう。私の理事就任は、期せずして設立10周年の年に当たりました。そこで、私は新たな視点でこれからの社会を見据えて、会員のみなさんと共に、これまで以上に地域の行政や市民、市民団体などへの情報発信や協働・連携を通じて、地域社会に貢献するNPOを目指したいと思ひます。みなさんのご協力をよろしく願ひいたします。
 藤井和貴【理事】新	三重は四日市高校から慶応大学工学部中退、渡辺プロダクション入社。その後、ソニーミュージック・エンタテインメント(SME)で、タレントマネジメント、レコード制作・宣伝、LIVE制作を手がける。SME時代の後半2002年から音楽ホール「Zepp」の東京と仙台の支配人を務め、同ホールの全国6都市全公演グリーン電力証書(風力)導入の中心的役割を果たした。2009年、SME退社後は複数の環境NPOの事務局長、理事を歴任。2012年1月より太陽光発電所ネットワーク職員。	事務局に常駐で勤め始めてから1年半が経ちました。この度の組織変更を起点に、自分の気持ちも入れ替え、日々の仕事に追われず、追い越し、高い位置から作戦を練るような感覚をつかんで行きたいと思ひます。5月の10周年記念の映像を作りながらPV-Netの偉大な歴史を再認識しました。しかし役目としては新しい事はどんどんやって行きたいと思ひますので今後もご指導、ご鞭撻をよろしく願ひいたします。
 加藤 聡【理事】新	大学卒業後、編集プロダクション、広告代理店勤務を経て、現在はフリーランス。主に環境・エネルギー・サステナビリティをメインテーマとしたフリーライターとして、雑誌やWEB、フリーペーパーを中心に執筆を行う。また編集や広告の仕事を手がけてきた経験を活かし、NPO等の情報発信をサポートする。NPO法人エコロジーオンライン理事。	マスコミ業界から約8年前に環境の世界に飛び込みました。現在は環境ライターの仕事もしつつ、事務局スタッフとして、広報を中心に担当しています。これまでにNPOのサポートなども手がけてきましたが、多くの団体がたくさんの方の情報を蓄積しているのにも関わらず、それを上手く発信できていません。いまや個人がエネルギーを生むようになったように、情報も自らが発信するのが当たり前の時代です。さまざまな情報発信ツールを活用することで、会の評価を高める一助になりたいと考えています。

1、はじめに

2012年7月から始まった固定価格買取制度（F I T）は日本の太陽光発電の普及の在り方を大きく変える結果となっています。これまで住宅用が導入量の8割以上を占めていたのが3.5割台に後退し、その代わり中大型の太陽光発電が6.5割台と大幅に伸びています。メガソーラー時代突入の様相を呈していますが、ここで思い起こされるのが特にスペインで大きく取り上げられた「ブドウ畑論争」です。ワインを長年作ってきたブドウ畑が大量に伐採されそこに何万枚の太陽光パネルが敷かれて儲け優先で農業が破壊されるとして、大きな論争となりました。本格的なF I Tが始まった日本でも各地で山林の乱伐採や田畑の埋戻しなどに対して住民運動が起こっているところもあります。

PV-Net内では、早くから山梨で田圃の法面に45kWの発電所を作り、普及を図ってきた大友さんの例もあり、またスマートソーラーライフの実現の一環として、農業を第一とする原則を掲げたうえでの太陽光発電の併存は大きなテーマとなっています。8/24に行った小諸エコビレッジ自然エネルギー学校の特別講座として民間で最も着実に研究実践しているCHP技術研究所の長嶋彬所長から農電併業の原理と在り方を学習しました。以下要旨を抜粋します。

2、ソーラーシェアリングとは

植物・動物にとって強い光は害であり、とりわけ水分がなければ死に直結する場合もあります。多くの動物は穴の中、水中、森の中に生活の場を求めており、植物もまた葉を茂らせることによって大部分を日陰にして、どうにか生き続けることに成功してきました。ほとんどの生物は太陽光が過剰な場合の対処として、水分を蒸散して体温を下げています。太陽光は生物にとって過剰なのです。植物の光合成と光の強さの関係を表す特性（Fig-1）においては、各作物には一定の光の強さ以上の光は光合成量の増大にほとんど貢献できないことを示しています。この光合成量がほぼ一定になる光の強さをその植物の光飽和点と呼びます。（例外としてサトウキビやトウモロコシのように飽和点を持たない植物もあります）この光飽和点の特性より耕作地や牧草地の剰余の光線から、農産・畜産物とともに電力をも得る方法、すなわち「ソーラーシェアリング」の考え方によって、太陽光発電には大面積が必要であるという最大の問題点が解決できる見通しを立てました。Fig-1において、稲でもおよそ2万ルクス（木漏れ日状態日向の5分の1）あれば80%の光合成量が得られています。東西方向に樹林や山や家屋があり半日間も日陰になるような水田の稲が十分実る事実からも説明できますし、レタスなどは人工の照明でさえも生産できることから太陽光が作物にとって強すぎるということが解ります。

この作物の持っている基本的な性

質を上手く利用すると、Fig-2のように太陽光発電のパネルを細くして間隔を開き農作業に支障のない高さ（コンバインが作業出来る高さ）の架台に取り付けて太陽光発電を行い、下の部分的に日陰が出来る農地では作物を収穫して広い農地で電力と作物の両方が得られるというソーラーシェアリング基本的構造が出来ます。

3. 農林省の対応

農林水産省は、農地に支柱を立てて営農を継続する太陽光発電設備について、パネルを取り付ける支柱の基礎部分を一時転用許可の対象とするなどの取り扱いを決め、平成 25 年 4 月 1 日に公表。農地のままなので、土地の固定資産税は低く維持されたまま発電を行えます。その内容の要旨は次の通りです。

- ①（パネル）下部の農地での営農の適切な継続が確実で、パネルの角度、間隔などからみて農作物の生育に適した日照量を保つ設計になっていること
- ②支柱の高さ、間隔などからみて必要な農業機械などを効率的に利用できる空間が確保されていること
- ③支柱の面積が必要最小限で適正と認められること
- ④周辺の農地の利用、農業用排水施設などの機能に支障を及ぼさない
- ⑤パネル下部の農地で生産された収量などを年 1 回報告する義務などが確認される必要があります。一時転用許可期間は 3 年以内。

営農の適切な継続が確保されていない時とは

- ①農が行われない場合
- ②パネル下部の農地における単収が
同じ年の地域の平均的単収とくら
べておおむね2割以上減少
- ③生産された農作物の品質に著しい
劣化が生じている
- ④作業に必要な機械等を効率的に利
用することが困難であると認めら
れる場合

といった事項が認められ
るときには、営農の適切
な継続が確保されていな
いと判断される可能性が
あります。

実際の認証の運営は自
治体の農業委員会が行っ
ており、一般的な傾向と
して、通達後も農地とし
て明らかに使用不可能な
農地の転用を嫌がる（福
島鏡石町の震災による激
しい地割れがあったリン
ゴ園の様に）傾向がまだ
続いています。農地には
第一種、二種、三種と
グレードがあります。二
種、三種では農地転用あり
の適用が各地で進んでい
ます。

PV-Net でも現在、生協と
組んでソーラーシェアリ
ングの有効性の実地テス
トを兼ねたモデルを千葉
で共同実施する計画を協
議しています。

Fig-2 ソーラー
シェアリング



住宅用だけはFIT
から外す。投機
の対象回避

なぎ倒された林野
(スペイン南東部)

Jumilla 地域
12万枚のPVパネル
200設置グループ企業
2万家庭世帯を賄う



ブドウ畑論争

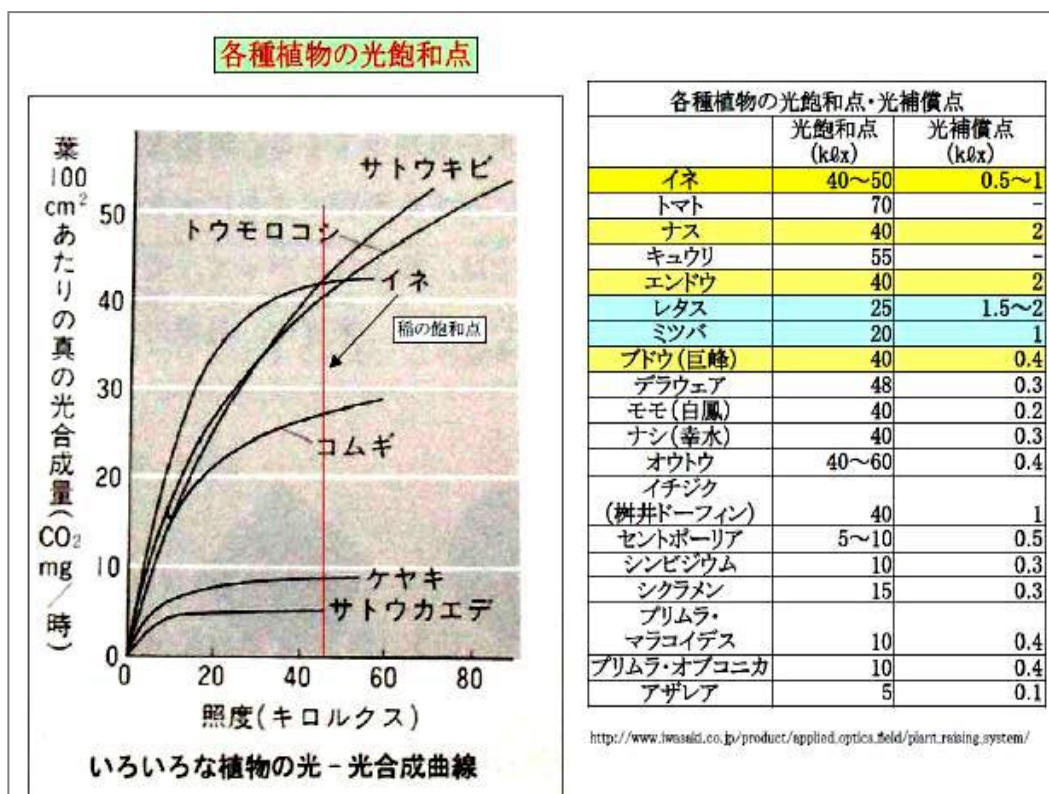


Fig-1 光飽和点



グリーン電力もっと活用して広めよう

～クラリネット 1 本でグリーン電力証書の開拓を続けている田中正敏さんをインタビューしました～

グリーン電力普及をまず身近なところからと、10 周年 (5/25)、通常総会 (7/27) と PV-Net 主催では各 200kWh を利用。その後も、9 月の再生可能エネルギーフォーラム in 盛岡 (500kWh)、10 月の池袋での映画上映&独立 PV 組み立て講座 (100kWh) など、主催や参加するイベントに、積極的にグリーン電力の紹介&営業中。以前から千葉地域交流会でも秋の環境イベントで毎年定例的に購入、推進をいただいています。

各地域交流会の関わるイベントでも可能でしたらぜひともグリーン電力の利用推進をお願いします。

今回は、クラリネット演奏・教育を通しグリーン電力証書の普及と開拓を続けている田中正敏さんにお話を伺いました。



【田中正敏さん】

国立音楽大学を卒業後、ドラマ「のだめカンタービレ」の舞台として有名な「フランス国立パリ高等音楽院」を日本人としては数少ない第一位で卒業。

クラリネット演奏を基盤として幅広い音楽活動をしています。東京学芸大学、尚美学園大学、平成音楽大学等でクラリネット講師を務める傍ら、環境問題への関心が深く、「グリーン電力」「間伐材ペーパー」を使用したコンサートを全国各地で展開し、音楽を通じより多くの人々に地球環境について気づいていただけるよう幅広い角度で活動すると同時に、現在、社会貢献活動の新しいスタイル形成作りに取り組んでいます。

現状、グリーン電力についての関心や利用が高いのは、ポピュラー音楽界の方ですね。クラシックの世界はまだまだです。私が最初にグリーン電力証書に出会ったのは 2008 年 4 月。ポピュラー音楽のイベントで知りました。

まず、自身のコンサートに 1000kWh 分の風力のグリーン電力証書を使用しました。それ以来、主催するライブのほとんどをグリーン電力で行っています。ここ 2 年は PV-Net さんの太陽光の証書です。

現在、たくさんの大学、学校、団体に教えていますが、学生たちには、クラリネットがアフリカの貴重な木から作られている事実と自然の大切さや、エネルギーや生物多様性などエコに関する最新の知識などを伝えています。定期演奏会等でのパンフレットの紙は間伐材利用を応援する紙、電力はグリーン電力を担当の先生には必ずお願いしています。

証書を利用することになった場合は、来てくださる観客のみなさまにも、グリーン電力証書の仕組みを伝えようと努力していますが、上手に説明するのはなかなか難しいですね (笑)。熊本県の高校の吹奏楽部の定期演奏会のパンフレットに盛り込んでもらった時は、先生が熱心でわかりやすい文章にしてくれました。

(右写真)

私事ですが、娘が大学の学園祭実行委員会に入っており、昨年は学園祭用にグリーン電力を購入しました。そうやって身近なところから、じわじわ広がってゆくのは楽しみです。

最近では、太陽光パネル、インバーター、リチウムイオンバッテリーのセットを購入しました。これでアンプの電力を供給し、生グリーン電力で小編成のクラリネット・サロンコンサートも行っています。

これからも音楽演奏を続けながら“自分ができること”からグリーン電力の普及を行います。将来の夢は、自然エネルギー100%の島・デンマークロラン島でミュージック・セッションを行うことです。



各地の発電量データと太陽光発電所マップ



2013年10月9日
現在の会員総数=
2,702人

※賛助会員（6法人）及びこれまでの
準会員も含まれます。

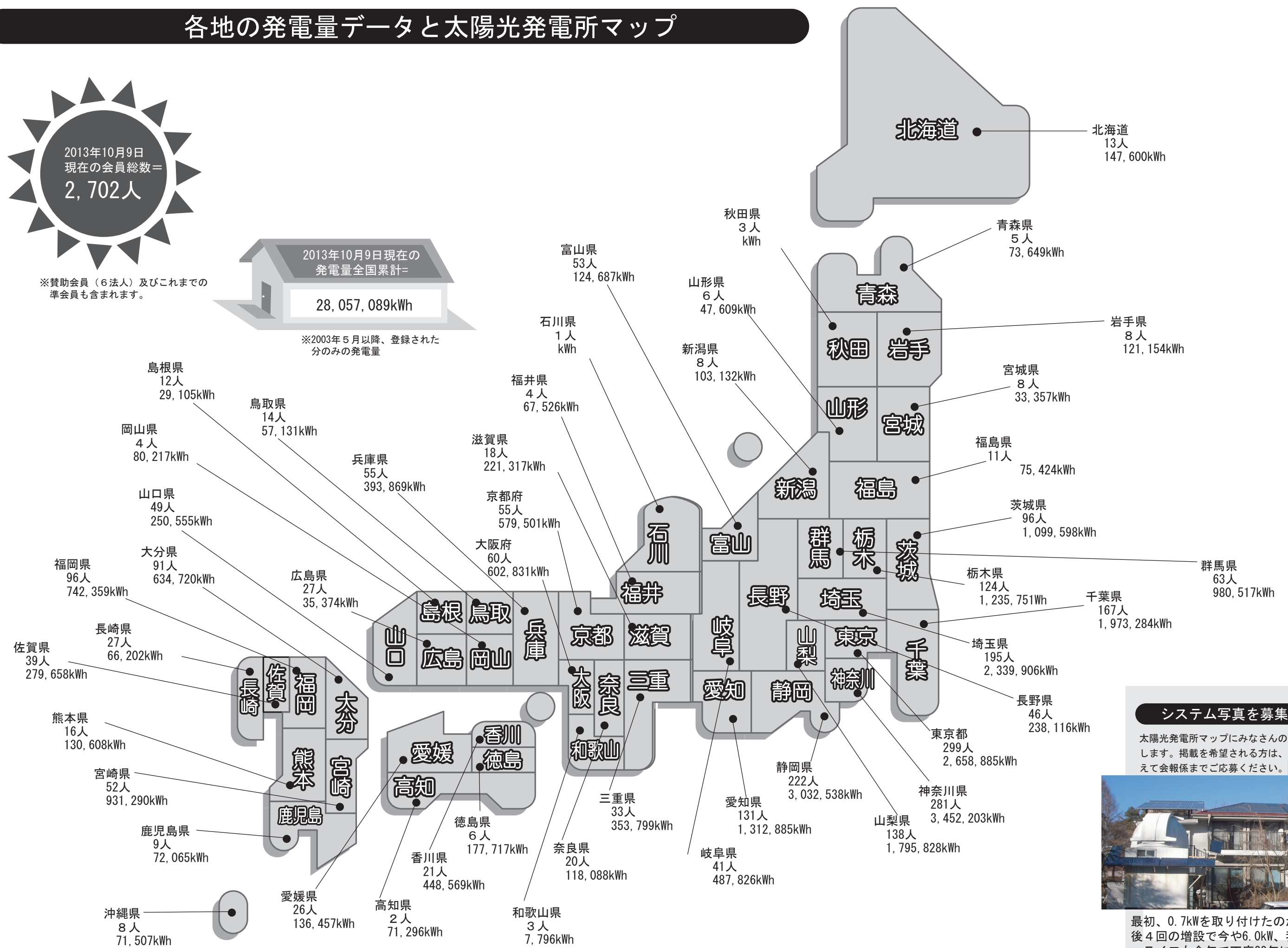


2013年10月9日現在の
発電量全国累計=

28, 057, 089kWh

28, 057, 089kWh

※2003年5月以降、登録された分のみの発電量



システム写真を募集します

太陽光発電所マップにみなさんのシステム写真を掲載します。掲載を希望される方は、写真にコメントを添えて会報係までご応募ください。



最初、0.7kWを取り付けたのが1993年、その後4回の増設で今や6.0kW。我が家のソーラライフも今年で丁度20年になります。
(A03051019/山梨県)

「自然エネルギー学校」イベントレポート

小諸エコビレッジと野田村を舞台に自然エネルギー学校を開催しました。

この夏、市民共同発電所のある長野県小諸市の小諸エコビレッジと岩手県九戸郡野田村で、自然（太陽）エネルギー学校を開催しました。PV-Net では今回のイベントをモデルに、全国で自然エネルギー学校を全国で開催し、自然エネルギー、太陽エネルギーの輪を広げていきたいと考えます。

【太陽エネルギー学校】

8月24日、25日、長野県小諸市の小諸エコビレッジで、「太陽エネルギー学校」が開催されました。小諸エコビレッジを会場に、過去4度にわたって行われてきた「自然エネルギー学校」ですが、今回はテーマを「太陽エネルギーの活用」に絞った特別編。「独立型太陽光発電システム」の組み立てをはじめとする2日の講座に、関東や関西から約30

名が集まり、太陽の恵みを活用する知恵を学びました。

キャンピングカーやヨット、ボートの世界では昔から一般的だったオフグリッドの太陽光発電システムでしたが、3.11以降、自然エネルギーへの関心の高まりや、災害時の電源確保を目的に、各地で自作ワークショップが盛んに行われています。こうしたワークショップの参加者の多くが、これまで電気やエネルギーに関わりのなかった人たちです。この日の参加者にも、ケーブルや圧着端子に初めて触れるという女性が多く、慣れない工具の扱いに四苦八苦していました。

太陽光パネル、チャージコントローラー、バッテリー、インバーターの接続が完了したら、屋外に持ち出して、問題なく発電できているかをテストしてみます。ファンやライト

が動いた瞬間は歓声が上がりました。

実際に太陽の下、パネルの角度を変えてみたり、影を作ってみたり、電流・電圧を測ってみることで、太陽光発電（以下 PV）や電気そのものの理解が深まります。ちなみに翌日は、エコビレッジ内に設置されている市民共同発電所の計測や故障診断を行いました。小さなシステムだけでなく、10kW～50kW クラスのミドルソーラーに実際に触れることができるのは、PV-Net が行う「学校」の大きな特徴といえるでしょう。

さらに今回の独立型太陽光発電の講座では、かつて家屋で使われていたパネルを再利用した「リユースパネル」を活用しました（性能確認済み）。今後はバッテリーについても、リサイクルバッテリーの利用を検討しており、このような、まだ利用できる資源の有効活用も PV-Net の目指す

テーマの1つです。

このほかにも、PVの予測発電量・生涯発電量についての講義や、農業と発電の併業を可能にするソーラーシェアリングの解説（9ページ参照）、PVと電気自動車

（EV）を組み合わせることで家庭内の電力をすべて自給するオフグリッドの可能性を探ったりと、太陽エネルギーの力と可能性を感じさせてくれるイベントとなりました。



【自然エネルギー学校 in 野田村】

9月21日、22日の2日間、岩手県野田村で、「自然エネルギー学校 in 野田村」が開催され、首都圏や岩手県内からの参加者約20名が、2日間のプログラムを受講しました。

野田村では初開催となった今回の自然エネルギー学校のテーマは、「被災地での自然エネルギーの活用」と「自然エネルギーを担う地域人材の育成」。今後、建設が計画されている2号機の建設プランを、参加者自らが考え、描くことを目標に、6月に完成したばかりの「野田村だらすこ市民共同発電所」の見学とシステム構成の調査、建設候補地の測量を行いました。候補地となっているマリンローズパーク野田玉川は、日本ではここでもしか手に入らない貴重な石が採れる鉱山です。しかし実際に現地を見てみると、同鉱山は南側に面しているため、朝夕の低い太陽をさえぎってしまうことがわかりました。十分な日射量を確保しようとすると、太陽光パネルをできるだけ敷地の南端に配さねばなりません。と

ころがその位置には昔から住民に親しまれてきた遊具がありました。

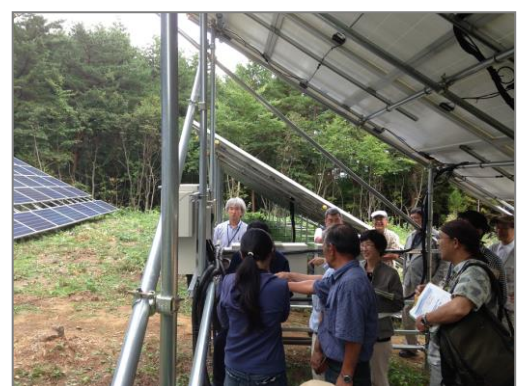
「子どもが減っていて遊具はほとんど使われていないから、撤去してしまっただuckさんの売電収入を村に落とそう」

「家族で楽しめる太陽光発電所にしたい。だから遊具とは共存させなくちゃいけない」

「空いたスペースで農作物を育てるものいいね」

次々と飛び出るバラエティに富んだアイデア。これらの意見と、使用するパネルやパワーコンディショナーの構成、さらにパネルの角度、電柱までの位置などを勘案し、グループに分かれて模造紙に設計図を描いていきます。各グループによるプラン発表では、参加者同士でさまざまな意見が交わされました。建設プランに正解はありません。エネルギーに詳しい人もそうでない人も、一緒になって共に育む（共育）のが自然エネルギー学校のスタイルです。

このほかにも、震災ガイドによる現地めぐりや、独立型太陽光発電システムの組み立て講座、故障診断装置を使った不具合測定体験といった参加型の講座を取り入れ、主体的な学びの場となりました。自然豊かな場所で開催する自然エネルギー学校は、自然エネルギーの重要性を、理屈ではなく心で感じさせてくれます。PV-Net では今回の2つの学校をモデルに、今後、全国で自然エネルギー学校を開催し、自然エネルギー、太陽エネルギーの輪を広げていきたいと考えています。



市民ファンドサポートセンター近況

復興の灯をともし「野田村だらすこ市民共同発電所」の稼働がスタート！

多くの方々の出資をもとに建設が進められていた「野田村だらすこ市民共同発電所」が完成し、6月8日、現地で点灯式が行われました。点灯式には関係者や出資者、小田祐土野田村長(写真下)ら約50名が出席。太陽光発電で電球を灯し、被災地主導となる自然エネルギー拡大の取り組みの本格始動を祝いました。

復興支援プロジェクトという性質上、急を要する形で発電所は建設されましたが、現在の出資状況は約7割。市民ファンドは、寄付とは異なり、意志ある市民のお金が目に見える形で運用されることが最大の魅力です。野田村のお父さん方(写真上)との架け橋となる本ファンドへのご参加をよろしくお願いします！



秋田市「大沢大規模発電所」

現在、順調にパネル設置作業が進んでいます！

PV-Net 会員のみなさま。はじめまして、エナジーイノベーションの小野と申します。PV-Net さんのサポートのもと、4月より出資者募集を開始した「大沢大規模太陽光発電所《県産品応援型》市民出資」ですが、現在までにたくさんの方にご支援いただいております。7月末にスタートした建設工事は11月28日に終了し、発電がスタートする予定です。

9月14日には、普段は絶対に入ることのできないメガソーラーの建設予定地を見学する「メガソーラー工事中だよ見学会」を開催。晴天のなか、地元・秋田市を中心に30名以上の方がお越しくださいました。参加してくれた子どもたちには、発電所の工事を体験してもらおうと、パネルの設置や、架台の杭打ちを模擬体験してもらいました。そして参加者みなさんでお弁当を食べながら、「どうして太陽から電気ができるのか」「発電所はどうやってできるのか」など、いろいろとお話させていただきました。

昨年1月にここに発電所をつくるぞと決意した時には、まだ融資の当てすらありませんでした。それがたくさんの方のみなさまに支えられ、いま夢が形になり始めました。大沢大規模発電所は、配当を秋田県産品によって行う、地域を元気にするメガソーラー事業です。

12月末までの募集となっており、みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

(エナジーイノベーション株式会社

代表取締役・小野隆史)

♥参加いただいた方からのメッセージ
「ふるさとの未来を誰もが明るく語り合える、そんな秋田にしたい。まずは自然エネルギーの活用、事業化から始めよう。太陽光、風力、地熱、バイオマス、そして、菜の花プロジェクト。これらは秋田の宝、希望の灯火」「秋田に生きた証しとして 秋田の大地に託す」

「脱原発を進めましょう！自然との共生を目指す我が国伝統の価値観を取り戻し、豊かな国土を子や孫に引き継いでいきましょう！」「原子力発電に頼らなくても世界が幸せに暮らせますように！」・・・その他たくさんの熱いメッセージをいただいております。



PV-Net 市民ファンドサポートセンター 専用ホームページ

<http://www.peoplefund-support.com/> もご参照ください。

PV川柳も、皆様のご支援の陰おかげで、しぶとく生き延びています。先のPV設立10周年総会でも、10年間にわたって会報の紙面を汚した否、飾ったPV川柳のベスト10選出のイベントが、会場を盛り上げました。川柳には付きもののTVはやり言葉を取り込んだ句がいくつもありましたが、倍返しは見あたりませんでした。次号に、期待しましょう。

最初は、和光のなかさんからの一句です。

○わが町も みんなの力で ソーラータウン

和光市は、人口が78,927人、世帯数が37,497世帯の小さな街ですが、太陽光発電を
設置している件数が、546件（なかさん調べ）とか。世帯数の1.46%という数字は評価できるのだろうか。

次は常連で、PV川柳の大御所、川崎の五右衛門さんです。

○あまちゃんが 終わった さあPV

○じえじえじえ の次は 太陽光

TVドラマとPVの因果関係ないがPVに日本中が目を向けてとの願望とか。

次回作は倍返し、十倍返しの傑作を。

○来年も 暑いぞ太陽 大活用！

暑いとPVは発電効率が低下するが、太陽熱は暑ければ暑いほどいいのだが、ちと複雑だなあ

○PVで 原子炉解体 電源を

○凍土壁 PV コンプレッサーの 出番です

五右衛門さんの解説です。阿武隈山系から無限に流れ出てくる地下水を、

壊れた原発を囲うように地下までの凍土壁を作って迂回させ、汚染させないまま海に流す技術。

原発の周りの人の住めなくなった土地にメガソーラーを作って冷凍コンプレッサーの電源にして、

廃炉が済むまで地下水を汚染させないで、これ以上太平洋に放射線汚染物質を流させないという願望。

締めは何でも知ったか振りする埼玉のW-XYZの川柳。

○売電は24（にいよん）48（よんぱー）の倍返しだ

流石に川柳の先生だとの、驚きの声が聞こえる。PV固定買い取り制が始まったときは、電力会社から24円で買って、余剰電力を48円で売っていた。半沢直樹より前の、あの時代が懐かしい。

川柳は、五・七・五の音を持つ日本語の詩の一つ。口語が主体であり、季語や切れの制限はありません。

会員各氏も思い立ったら、川柳を一句作って、PV-Netの事務局に送って下さい。次号のPV-Net Newsでご紹介します。ペンネームも自由です。

〈普及広報部・松田広行〉

★再生可能エネルギー世界展示会【7/24-26】

@お台場国際展示場の最終日では秋田大沢発電所の紹介に中国(上海)からのグループも通訳と共に聞き入る風景も生まれました。(7月26日)



★10周年イベントの懇親会では過去掲載された川柳の来場者による人気投票が行われました。場内たくさんの方の掲示の中から、まずは5作品がステージに集結、松田理事から10年の流れと発表が行われました。



地域交流会 報告

関西から

一昨年より京都、兵庫を含めた関西地域交流会交流集会を開催しており、第3回を9月7日に開催、48名の会員と市民が集まりました。

今回のセミナーのテーマは「市民協働発電所」で、会員交流会の2部構成です。セミナーでは地域エネルギーを考える、現状と展望、協働事例の3題の発表があり、市民協働発電所に関する情報提供と、共通認識で交流会として発電所の設置に向けた第一歩となりました。

交流集会では今後の関西ブロック協議会の運営方針の説明と活発な発言がありました。運営については京都、兵庫に続く、大阪地域交流会の立ち上げ。関西地域交流会としては奈良、滋賀、和歌山が残るが、この地域の活動についてはそれぞれの地域交流会設立に向けた活動をして行きます。関西2府4県はブロック協議会を形成してその代表に西田さんが就任。各地域交流会はそれぞれの活動をしますが、ブロック協議会が調整機関となり交流会だけでは取組めない活動を協議して推進します。ブロック協議会のなかに委員会を作り、専門知識のある人材を委員とし

て広く求めて進めていく。委員会については健康診断、Green電力証書、協働発電所に関する設置を検討中です。

今回の理事改選で関西から三石さんが副理事長に、森岡さんが理事に選ばれ、センターとの距離がより近くなることが期待されます。理事会開催前にブロック協議会を開き、関西の意見調整を行い、理事会での活発な議論をバックアップします。

今までの活動を見据えて、これからの10年をどのように活動すべきかを話し合う貴重な交流会でした。

(大阪地域交流会 南里 弘)

静岡から

伊豆の国電気の畑市民共同発電所1号機の発電開始より9月9日で1年が経ちました。近直の東京電力の検針は9月9日でちょうど一年の発電量検針になります。発電量は21,427kWhで、パネル容量が18.24kWなのでパネル1kW当たりの発電量は1,174kWhとなり、予定した発電量に比べて17.4%高い発電になり、関係者一同喜んでおります。今年の7月には借入金の第1回目の返済も滞りなく済んでお



<電気の畑全容>

ります。

また、PV-Net 静岡世話人会傘下の合同会社静岡市民共同発電所運営の市民共同発電所2号機(パネル容量25.92kW)も今年の6月19日には発電開始し9月9日までの発電量が7,294kWhと順調に発電を始めております。



<2号機発電所全容>

それから、各発電所には独立電源用パネルを設置し、バッテリー充電し夜間の照明を設置しました。日没より真夜中までの点灯になります。電源喪失時には独立電源は非常用電源として使え、地域貢献を目指しております。



<夜間照明1>





＜夜間照明 2＞

現在、独立電源の利用を、LED照明だけでなく、家庭内での利用の検討を世話人会として進めております。テレビ、冷蔵庫等への利用、イベントでの利用等です。

ただし、独立電源の利用を進めるに当たり蓄電池の問題があります。蓄電池の新品を購入すると、それなりのお金が掛かります。家庭で利用するとバッテリー容量は300Ah程度必要と考えております。リユースバッテリーの利用には寿命の問題があります。

この様な折、近くに再生バッテリー技術の普及を図られている方と出会い、協力を得ることができました。この方にはPV-Netの会員になっていただくことができました。

このほか9月29日には「静岡市民フォーラム」が掛川市で行われました。講演はPV-Netより藤井代表、鮫島世話人副代表、他団体よりITE副理事長川辺氏のバッテリー再生の講演ありました。30名以上の参加があり、大変盛況でした。ちなみにこの日、講演時に使用した、PC、プロジェクトの電力は太陽光より充電したバッテリーで賄いました。

静岡地域の今後の予定としては、10月27日に三島共立病院主催健康まつりへの出展。11月初旬に静岡大道芸ワールドカップ出展、11月10日、伊豆の国電気の畑見学会があります。

(静岡交流会世話人伊藤博文)

山梨から

今回はサッカースタジアムでの活動報告です

①7月31日に、ヴァンフォーレ甲府の試合前にスタジアム外で設けられている「小瀬エコブース」を担当しました。4年前から、小瀬エコプロジェクト実行委員会が発足して、日本一のエコスタジアムを目指して活動を始め、環境市民団体が交代で担当しています。

今回は、PVネットの宣伝の他、4年前に実行委員会が作成した「ソーラーカー」体験を行いました。「ソーラーカー」は、古くなった電動自転車椅子をリメイクした物で、太陽光発電パネルや軽い車体はサポーターや工業高校生が手作りしてできた物です。エコブース活動の甲斐あって、甲府のスタジアムは他県のチームスタッフが驚くほど環境に配慮したスタジアムとなり、ヴァンフォーレ甲府もJ1定着を目指して頑張っていて、Jリーグの県の人口規模別の来場者数、県民の関心の高さは、全国でもトップクラスです。そのようなスタジアムを環境のシンボルとして、一般の方たちにアピールしていくことは大変意義のあることだと思います。

②グリーン電力証書利用のJリーグ試合実現！

8月17日、J1ヴァンフォーレ甲府（以下VFK）の試合で

2,400kWhのグリーン電力証書が利用されました。8月はVFKの環境月間です。エコスタジアム実行委員会を通してVFKの試合でグリーン電力証書を利用していただきたい申し出を行ったところ、快く受けて下さり、タイムリーにスポンサーも見つかって環境月間に行おうと言うことで、8月17日の試合で利用が実現しました。試合時間の照明の電力量相当です。

ヴァンフォーレ甲府ではこの取り組みを「グリーンエコ」と称して新聞等でも大きくアピールされ、また、ハーフタイムでは、私もPRさせていただきました。

今後も、ぜひこの取り組みを継続していただきたいと思います。個人的には、サポーターとしてもVFKを応援し続けます。

(芦澤公子)



地域交流会 報告

神奈川から

神奈川地域交流会の活動状況など、月日を追って簡単に紹介します。

(1) 5月25、26日(土・日)「アジェンダの日2013」に出展。

毎年行われる県・環境計画課が企画する大きなイベントの一つで、神奈川テレビ(TVK)の「収穫祭」と共催の形で行われる。今年はアフリカ会議が横浜市で開かれる関係から、前倒しで開催された。地域交流会の出し物は、おなじみの「太陽光発電でドン!」、パネル一枚の独立型発電所で、DVD、テレビの放映、太陽電池パネルの発電実験の噴水、ソーラグッズで子供たちの遊び、ソーラー何でも相談コーナーの開設など。展示会場は、日本大通りと象の鼻パーク。天気も良く、大変な人出であった。

<アジェンダの日 PV-Net ブース>



(2) 6月8、9日(土・日)「第32回横浜開港祭」に初出展。横浜市、横浜商工会議所、横浜観光コンベンション・ビューロー、横浜青年会議所等が主催するイベントで、「マリンイベント」「ラウンドイベント」「ステージイベント」の三つの会場がみなとみらい21エリアの、臨港パークおよび、みなとみらい21地区・山下公園・新港地区・その他周辺に繰り広げられた。

そもそも「横浜開港祭は「開港を祝い、港に感謝しよう」というテーマの下、市民が一堂に会する「市民祭」として1981年「第1回横浜国際デー“プレ横浜どんたく”」としてスタートしたというだけあって

市民の出足はものすごいもので、夜は花火大会で盛り上がっていた。

(3) 6月23日(日)横浜ホームコレクション(住宅展示場)「体感型エコイベント」に参加

横浜ランドマークタワーのふもと、横浜美術館との間の住宅展示場、以前ここで出展したので声がかかった。

そのほか、ソーラークッカーのグ

ループと、マイ箸を作る会の3団体が出展した。住宅展示場であるから、訪れるお客さんもそう多くはなく、相談コーナーも出していたが、残苑しながら太陽光発電に関心を示す方は限られていた。

(4) 7月27、28日(土、日)「ひらつか環境フェア」に出展



<ひらつか環境フェアで「ドン!、記録、きょうのトップだよ!」>

場所は、平塚市代官町の「OSC湘南シティ」で大きな商業施設に囲まれた広場の一角であった。

このイベントも毎年参加しているので、市からは期待されているので、近隣グループPV湘南のメンバーが中心になって運営している。出し物として期待されるのが、愛知万博で披露した、ジオラマ「ソーラータウン」である。子供たちに人気があるので、あちこち修復したり、走らなくなった電車は取り替えたりしながら、運んでセッティングが大変でもいまだに活躍している。

(5) 8月11日(日)「青少年のための科学の祭典」に出展

神奈川県立青少年センター・(財)日本科学技術振興財団・科学技術館の主催する年中行事である。

横浜西区、桜木町駅近くの紅葉坂にある県・青少年センターで行われる。今年で3回目の参加になる。

子供たちの夏休みにあてて真夏の真っ盛りに開かれる。企業やNPO、学校など20団体以上が、いろいろな実験を披露したり工作教室を開いたりしている。この日も猛烈な暑さの一日であった。われわれPV-Netはお日様大好きチームなので、ブースは外。テントの中は蒸し風呂状態。太陽電池の発電は良好、商用電源を一切使わないで済ますことができたのは特筆される。

今年は子供たちに環境問題に関心を持ってもらおうと、「地球環境クイズ」に挑戦してもらった。賞品は、ソーラーグッズ(105円)。賞品目当てか、50個用意したのに、午前中で終わってしまった。

(6) 8月31日(土)第3回ワークショップ「出前発電所をつくろう!」を開催

4月から始めているこの工作教室、参加したいという人が次々と現れて、今回3回目を行った。

太陽電池モジュール50W、コントローラー、インバーター、蓄電池(自動車用)とターミナル、コンテナボックス、キャリア(運搬用)、電線など、設計・解説書。これらの材料費を3万円に抑える。

今回の参加者は、組立実習組5名(会員3、一般2)、見学3名であった。担当の世話人は4名。約1時間、世話人の古峰さんによるレクチャー。休憩をはさんで組立実習、約

1時間半で完成。実習では太い電線の被服がうまくむけなくて汗だくの方も見られてが、出来上がりのチェックを済ませて達成感の笑顔がこぼれていた。



＜ワークショップ「出前発電所をつくろう!」で、パンチの使い方も指導＞

(7) 10月9日(水)には、神奈川県第一のメガソーラー「愛川太陽光発電所」、「宮ヶ瀬ダム水とエネルギー館」「津久井発電所」などを巡る見学会を予定している。

(横谷公雄)

茨城から

茨城では2ヵ月毎に世話人会を開催しPVを中心にした情報交換、活動について自由闊達に議論している。

昨年5月FIT制度発足に伴ってPV設置による普及は加速度的な勢いで伸びているが一方さまざまな疑問や問題点が指摘されている。

今話題になっているテーマは

- ・住宅用PV設置費の価格調査：近隣家電店表示の調査
- ・メガソーラー設置業者の動向
- ・FIT制度は「濡れ手に粟」の美味しい事業か
- ・メガソーラー事業者優遇策と住宅用PVの違い
- ・FIT制度と事業者の格差拡大の推進

・メガソーラーにおける長期年月経年で予測される不安事項

・自然エネルギーとしてのPVの限界と意義

・持続的、長期的に発展するPVの技術、市場のあり方は。

・TOB(地球温暖化防止)と自然エネルギー政策

先の震災で原発、エネルギー問題がわが国の喫緊の安全問題として浮上しているにもかかわらず、景気、経済政策が原発を絡めてCO2削減計画を後回しにして、TOB運動の影を薄くしている感がある。

しかし昨今の国内外における異常気象による甚大な被害のニュースの頻発は地球温暖化の影響を確かなものとして実感させつつある。

すなわち「経験したことのない」突風や竜巻、豪雨の異常気象の被害がすぐそこに万人にとって新たな「気象恐怖」として日常的のものになろうとしている。放射能、異常気象の恐怖から回避するために脱原発、CO2削減は待ったなしの共通の目標のはずである。・PVの啓蒙、普及活動と言う従来の会の目的からさらに一步踏み込んだ新たな発言、提言をする時期にあるのではないだろうか。

(前川淳治)

埼玉から

埼玉地域交流会では、本年度の見学会を見学場所の説明員が付いて貰える平日とし、9/13日に開催しました。見学会案内時のアンケートで、26%の方が休日でないと出席できないと回答いただきました。

この方々が出席頂けない状態で平年30名余の出席者がちょっと寂しい24名での開催に成りました。

朝8時に大宮を出発し、平日の首都高の渋滞に遭いながらも、予定より早くに第一見学地「浮島メガソーラ」「川崎エコ暮らし未来館」に到着しました。まずはエコ未来館でCO₂削減と、ゴミ削減の3Rの一つ、資源リサイクルを体で体験した後、いざ、青空の下メガソーラ見学へ。

埋め立てで長期間通常の建設地として使えない土地を東京電力が借り受けて、とりあえず20年間のPVを設置した広大な光景に全員感激、羽田から飛び立つジェット機を背景に記念撮影。前倒しのスケジュールで横浜中華街での昼食後、横浜の歴史を色濃く残す帆船日本丸・横浜みなと博物館で、もっと見学時間がほしい……の気持ちを残して、みな待ちどおしいキンビールの工場見学、試飲会に向かいました。

帰りは途中、首都高の交通渋滞で、ハプニングに遭遇？しながらも無事ほぼ予定時刻近くで大宮到着出来ました。明年からは、また、休日を使つての見学会に戻す方向で検討していく事になると思われます。

(桑原紀仁)

<気持ちよい青空の下太陽光パネルと羽田からのジェット機バックに浮島メガソーラで>



発電所長のつぶやき

毎月発電量を送ってくださる会員さんのコメントを“発電所長のつぶやき”として紹介します。

【5月の通信欄より】黄砂等の付着を除去する必要がありますか。屋外のウッドデッキ等はひどいものでした。最近、パネルを勧める電話がよくきます(岐阜 F さん)。/ 四月初半、好天が続き桜の開花が例年より約10日も早く、後半は、花冷えとなり、異状気象であった、入浴回数が減った為、買電が著しく減少、自給率が向上した(東京 W さん)。/ PV-Net、10周年お目出度ございます(千葉 M さん)。

【6月の通信欄より】今月は北面2号機の方が南面1号機より元気でした合計発電量も2008年設置以来最大の数値を記録いたしました(群馬 S さん)。/ 5月での最高発電量となりました(千葉 K さん)。/ 発電量が当発電所にとって最高でした(5月分)。原因は、2010まで過去30年間の降水量5月分平均値の41%という好天気にめぐまれた為。従って、自給も最高(東京 W さん)。/ 毎月400KWを超える発電量があると嬉しいですが、太陽光発電所を開設しているところが軒並みになりました(岐阜 F さん)。/ 5月分は発電所開設してから最高の発電量だと思います。発電グラフを作っていますがグラフ天井まで届いていました(埼玉 Y さん)。

【7月の通信欄より】6月は雲が多かったな!!(茨城 K さん)。/ 梅雨入りが20日も早くなった為発電量も減少(静岡 I さん)。/ 梅雨入りが20日も早くなった為発電量も減少

(静岡 I さん)。/ 消費が599kWhで初めて発電量が消費をうわまりました。全国的にはどうですかねえー(群馬 S さん)

【8月の通信欄より】毎年、毎月だいたい同じような発電をしていて年間数量が見える(愛知 O さん)。/ 今私の家の周囲がメガソーラーのパネルが敷き詰められようとしています。私が家の屋根上にのれば発電量にどういう影響があるか強い関心を持っています。視点などご指導ください(長野 M さん)。/ 7月中も夜も蒸し暑く(日中はもちろんですが)エアコン使用も多かったことと曇り雨の日が多いことも、発電量も売電量も少ない月となりました(岐阜 F さん)。

【9月の通信欄より】入浴はシャワーのみとした処、入浴時間の節約のみならずヒートPの運転時間も減った、一挙両得このことかと思った太平洋高気圧強大なこと海水温度」が今年は著しくスーパーセルという巨大積乱雲の発生で竜巻の発生も多いと云っている(東京 W さん)。/ トラブルは特にありませんでした。暑い夏でしたね。老体の身に堪えてます。例年ほとんど使わないクーラーを、大分使ってしまった。発電量もかなりあったので、ホッツとしています。その分雨が少なかったということではありますが(東京 T さん)。/ いつもお世話になりましてありがとうございます。やっとインターネットがつながるようになったのですがまだ目的地までたどりつけませんのでよろしく願いいたします(滋賀 S さん)。

<連絡ありがとうございます>

2013 第一回理事会報告

◆参加者◆ 藤井代表理事、都筑代表理事、横谷副代表理事、三石副代表理事、伊藤専務理事、國井理事、

梅澤理事、松田理事、武田理事、森岡理事、藤井(和)理事、加藤理事、スカイプ参加/都筑修三(オブザーバー)

8.3 事務局にて

共同代表となった都筑代表理事、そして三石副代表理事、森岡理事、事務局の3名を新たに加えた体制で行われる2013年度最初の理事会は全理事から自己紹介と抱負の発表、その後、会は始まった。

【確認事項】

7月末の総会での予算案修正の件は前年度の繰越金を入れ込むことでよりわかりやすい形に修正をするに。それを受けて、新たに見直された予算案が提示された。修正案については、秋に発行予定の会報と同時に発送を行い、同時に会員ページへのアップを行う事になった。

地域交流会の報告、各部会の方針を含めた全体の年間スケジュールの確認を行った。通常総会と大集合イベントをカレンダーの柱に今年度も展開していくが、総会は2014年7月19日と例年7月の最終土曜日だったが、夏祭など地元の催しと重なる会員が多いため、第3週に変更。大集合イベントは3月15日。地球環境基金の報告会を兼ねて開催する。理事会日程は、9月28日、12月7日、2月22日、4月19日、5月24日、6月21日となった。

【各部からの報告・提案】

PV-Green 事業部からは継続、新規ともに販売強化を行う具体案を探る話。その中で伊藤専務理事から講演依頼やイベント参加依頼があった時には、主催者への購入の働きかけを必ずするという提案が出された。

売上に関しては4~6月期で約110万kWhの販売実績。そのうち環境省の事業が90万kWh。純粋な販売量は9万3000kWhで、昨年同時期(13万4000kWh)と比べると落ちているとの報告があった。

組織部からは、センターと地域交流会とのコミュニケーションの強化は引き続き行うが、新しい部分としては岩手、秋田など市民共同発電所事業もあるので東北地域の組織化を目指したいとの提案があった。

普及広報部からは、10年にわたり蓄積してきたPV-Netの実績や資産を、もっと世間に発信し、団体の評価を高めて行きたい。インターネットサービスの活用、会報誌のリニューアル、告知と報告ワンセットでの発信など、さらにさまざまな施策を行なっていきたいと提案された。

又、7月24日~26日のお台場ビックサイト「第8回再生可能エネルギー世界展示会」に出展ではブース内でのゲストを招いてプレゼンテーションを実施したりその様子をUSTREAMやSNSを使いリアルタイムで発信したという報告もあった。

相談室からは、入会后PVカルテ登録がない人が多いため、そのフォローを地域の世話人が行うことで、会員とのコミュニケーションや、地域の活動への参加を促すきっかけづくりにしたい。まずは健康診断システムの回復が前提となる。また、設置後10年以上の会員の交流会を実施し、故障の早期発見につなげたい

と提案があった。

【各報告・提案の中から】

関西の組織変更に伴い三石、森岡両氏から、関西各地域の最新の動きと共にPV-Net組織全体への建設的な提案も数多く出された。

8月24,25日に小諸で自然エネルギー学校を開催するが内容は盛りだくさんで、独立型太陽光発電の自作、生涯発電量や予測発電量の計算の実践と実際の測定を行い市民共同発電所のメンテナンスを実践できることのステップ、さらには長島彬さんによるソーラーシェアリング、湯浅農園号のEV試乗会と蓄電池の基礎的な話、アンペアダウンなどの内容。ここでのカリキュラムをスタンダードなものとして全国の地域や自治体での開催につなげたいとの提案。

市民ファンドサポートセンターからファンド進捗状況に関しては

・野田村だらすこ太陽光市民ファンド 131口/189口・秋田大沢大規模太陽光市民ファンド 10万円:5口/100口 100万円:6口/20口 30万円 32口/100口。

静岡伊豆の国市「電気の畑」は出資者への1回目の返済の支払いを7月31日に行った。6月に完成した2号機に関しては、まだ複数口残っている状況・・・との報告があった。

各地域交流会とセンター(全体・事務局)との連携についても多く話され、事業の集約と地域展開の方法と連携強化について話された。

(記: 藤井和貴)

☀ ご寄付、どうもありがとうございました！

清水勉 副島務 國井範彰 都筑修 三 メディエコ研究開発 杉本三智夫 奥山道江
八木隆雄 所宣夫 中村和歳 三代川正秀 渡辺富江 伊藤進 藤川百合子 南澤陽一
山本長晴 吉田幸二 齋藤光由 野田勝彦 野田伊織 増原鈴奈 鳥越隆司 平野真
赤穂榮一 下井脩 南里弘 糟谷浩造 横山英俊 河原一郎 赤穂国義 赤穂直文
中村和歳 岸本晋 貴傳名哲康 宮田佳 代子 長沼真澄・美恵子 菊池眞幸
林彰一ほか13名 市川加代子 板坂太郎 三橋則夫 宮崎英昭 柳瀬仁茂 横山英俊
清水英和 櫻洋一郎 清水紘司 戸井田 茂子 戸井田康宏 伊藤喜文 山田敏博 福田勤
玉野みどり 鈴木孝子 安原克彦 浅輪剛博 細渕勇三 渡邊新助 三石博行
アイアイインターナショナルスクール 森崎要造 鈴木昭男 山路裕敏 内山明夫 吉広孝行
吉富政宣 森八十八ほか8名 鈴木春雄 小野隆史 澤田 威 高木史人ほか25名 中田タカ子
・・・活動へのご理解とご支援に厚くお礼申し上げます。

☀ PV-Net 活動を応援してくださる、 賛助会員を募集しています！

太陽光発電所ネットワークでは、活動趣旨に賛同し運営を支援してくださる団体・企業・
個人の皆さんを募集しています。賛助会員名は当団体のホームページ（以下 PV-Net HP）、
賛助会員一覧にも掲載されます。募集の詳細はPV-Net HPをご覧ください。

	年会費（入会金※1）
企業・団体	3万円/1口 1口～※2
個人	1万円/1口 1口～

事務局までお問い合わせ下さい。
※1 初年度は入会金のみで年会費は不要。
※2 年会費は1口以上でお申し込み下さい。

☀ 事務局発信twitter、Face Bookページもご覧ください。

https://twitter.com/PV_Net ※それぞれPV-Net ホームページのTop からアクセスできます。
<https://www.facebook.com/PVOwnerNetwork>
市民ファンドサポートセンター専用ホームページはこちら。
<https://www.peoplefund-support.com>

ペンギンのはばたき

□奇跡の星・地球。自然の中で生かされている
今日に感謝です。いつもありがとうございます。（い）
□3.11の大地震、津波、竜巻来襲、前例のない台
風の猛威と続いて、温暖化の影響がいよいよ姿を
露にしてきたようだ。しかし放射能の影響は深刻さ
が目に見えないだけ悲惨である。（都）

□最近、独立型の太陽光発電システムを使い、自
然エネルギー 100%での映画上映会を行いました。
電化製品の省エネ化によって、オフグリッドの可能性
をすごく感じています。（KATO）

□NHKで、あまロスしてる方は野田村〜久慈へお早
めにご旅行ください、あちらは冬が早く来ます（Kazz）

Editor's Notes



特定非営利活動法人
太陽光発電所ネットワーク（略称:PV-Net）
〒113-0034 東京都文京区湯島1-9-10
湯島ビル602号室

〈交通のご案内〉

- ①JR/地下鉄御茶ノ水駅「聖橋口（秋葉原
駅側）」より徒歩5分
 - ②地下鉄新御茶ノ水駅「B1出口」より
徒歩5分
- TEL 03-5805-3577
FAX 03-5805-3588
URL: www.greenenergy.jp
E-mail: info@greenenergy.jp

<4月>

- 3 東京地域交流会世話人会
- 6 埼玉地域交流会世話人会
- 13 理事会

<5月>

- 7 東京地域交流会世話人会
- 11 埼玉地域交流会世話人会
- 12 関西地域交流会世話人会
- 13-17 千葉「市民活動展」
- 18-19 くまがやエコライフフェア出展
- 25 PV-Net 10周年記念イベント
- 25, 26 アジェンダの日（神奈川）

<6月>

- 1-2 エコライフフェア2013出展
- 7 東京地域交流会世話人会
- 8 埼玉地域交流会世話人会
- 9 野田だらすこ発電所点灯式
- 23 理事会
- 30 伊豆の国市民共同発電所2号基
完成祝賀会

<7月>

- 5 東京地域交流会世話人会
- 6 蓄電装置付独立型PVシステム
製作会（埼玉）
- 13 埼玉地域交流会世話人会
- 20-21 住宅展示場太陽光発電
フェア出展（埼玉）
- 24-26 RE2013展示（お台場）
- 27 通常総会（明治大学）
- 31 ヴァンフォーレ甲府スタジアム
エコブース（山梨）

<8月>

- 5 東京地域交流会世話人会
- 10 埼玉地域交流会世話人会
- 21 中部世話人会世話人会
- 24-25 太陽エネルギー学校（小諸）
- 31 神奈川「出前発電所」講座

<9月>

- 7 関西地域交流会
- 13 浮島メガソーラー見学（埼玉）
- 21, 22 野田村自然エネルギー学校
- 28 エコメッセちば（千葉）
- 29 静岡市民フォーラム



この会報はPV-Greenのグリーン電力証書
100kWhを利用して印刷されました。